

父のない子と

子のない父と

一路東京へ

明治ももう四十年を越えていた。日露戦争を苦難の末勝ち抜いた日本は、世界の舞台では、他国にとってもはや無視することなどかなわぬ脅威となりつつあった。そんな日本で、一人の青年が上京の途上にあつた。小川三四郎二十三才、熊本的高等学校を卒業し東京帝国大学文科大学へ入学するのである。今日ならば空路二時間もかからぬ距離だが、蒸気機関車にひかれての熊本から東京への汽車旅は長かつた。三四郎は九州の田舎の地主の息子、実家は裕福で、息子に高等教育を受けさせる余裕も十分あつた。明治も末年の当時、三四郎は小川家のみならず地元期待の星でもあつたのである。これまで学問には励んできた、外国人教師から英語も教わつた。だが上京は初めてのことで、ブッキッシュな都会の知識を携え、期待を双肩に担い、希望を胸に、一路東京へ向かつたのであ

る。

これから東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具った学生と交際する。図書館で研究する。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。

学問への期待と、後日の成功への願いを胸に秘め、二十三才の青年は車中の人となつていた。

車中の時間の経過は東京への接近を意味する。乗り合わせた爺さんは汽車に乗り込むとすぐ肌をぬぎ、しかもその肌にお灸のあとをみせていた。前時代とちがうのは頭にまげがないだけ、と言って良い田舎者である。隣りに座つた女に信心の大切さを説くと、汽車を去つた。田舎者の爺さんの退場は、都会の接近の予告であつた。

名古屋での一泊を含む汽車旅の間、三四郎がとくに接した

牛 村 圭

人には他に二人いた。一人は爺さんが下車する迄爺さんの話相手であった、夫を戦争にとられたという若い人妻である。

インソップの話に出てくる蛙の親は、初めて牛を目にした子蛙がその大きさに驚いて報告するのを、自分の腹を徐々にふくらませながら話を進め、とうとうそれでは大きさが不足して破裂してしまった。何もこの蛙の例を持ち出すまでもなく、人もまた、自らの知識・体験を基に、意識的あるいは無意識のうちに比較作業を行なっている。三四郎の田舎でこの人妻に相当するような女性といえば「三輪田の御光さん」だった。従ってこの女もまた「御光さん」との比較のもとで三四郎の観察を受ける。

女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が白くなるのでいつの間にか故郷を遠退くような憐れを感じていた。

それでこの女が車室に這入って来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。この女の色は実際九州色であった。三輪田の御光さんと同じ色である。

それだからこの女は、次第に故郷を遠のく三四郎にはたのもしい味方であった。不図したことだからこの女と同宿しかも

同衾することになったが、彼女は「よっぽど度胸のない方ですわ」と言っただけで去って行く。地方のエリートとしての誇りを胸に上京の途にあった三四郎は、これ迄受けた学問が何ら処生の道具とならないことに啞然としたのである。田舎の、即ち旧時代からの倫理感で育てられた彼にとり、この人妻は前途の波乱をも思わせるような、正体不明の女だった。

この人妻と入れかわるようになり込んだのは中年の男、身の丈は一七〇センチほどの、髭を濃く生した男だった。

髭を濃く生している。面長の瘦ぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋が真直に通っている所だけが西洋らしい。……三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう、これより先もう発展しそうにもない。

神主じみているが鼻だけ西洋、つまり和洋折衷を体現したようなこの男は、既に車外の人となっていたあの田舎者の爺さんとは異なり、明治の人、明治の都会人、と三四郎には写った。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より頭

の中の方が広いでしょう。囚われちゃ駄目だ……」

警句じみたことを時折口にしたこの男は、こう三四郎に言い残し、二人は別れた。「囚われちゃ駄目だ」という処生訓を、あるいはまた東京の見方を、三四郎に与えたこの人が広田先生その人であった。

三四郎の東京

三四郎が東京で驚いたものは沢山ある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴る間に、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。次に丸の内で驚いた。尤も驚いたのは、どこ迄行っても東京が無くならないと云う事であった。……すべての物が破壊されつつあるように見える。そうしてすべての物がまた同時に建設されつつあるように見える。大変な動き方である。

東京に出た三四郎は、ともかく驚いたのであった。都会の喧噪・動き方に驚き、不愉快にさえなった。熊本での学問は畢竟机上の学問であり、先に記した人妻に対して同様、「今迄の学問はこの驚きを予防する上において、売葉ほどの効能も

なかった」からである。

驚き、不愉快になり、そして不安になった三四郎。だが前途有為な若者として道を切り開いていくことこそ彼の使命だった。都会の喧噪・変転のすさまじさに驚愕した三四郎は、故郷の母を訪ねてみよと言われた野々宮宗八を、理科大学の実験室に訪ねた。そこは「すこぶる閑静」であり、即ち喧噪な世俗社会から隔離された地であったが、やはりここでも三四郎は大いに驚くのであった。

……野々宮君は笑いながら光るでしょうと云った。そうして、こう云う説明をして呉れた。

「昼間のうちに、ああ準備をして置いて、夜になって、交通その他の活動が鈍くなる頃に、この静かな暗い穴倉で、望遠鏡の中から、あの眼玉のようなものを覗くのです。

……外套を着て襟巻をしても冷たくて遣り切れない。……」三四郎は大いに驚いた。驚くと共に光線にどんな圧力があって、その圧力がどんな役に立つんだか、全く要領を得るに苦しんだ。

ちんちん電車と人の多さと東京の広さ、そして急速な破壊と建造。一方、閑静な地で行なわれる世俗を超越したような学問。熊本時代には到底体験するどころか想像もかなわな

った両極端の現実に、三四郎はただただ驚いたのである。

野々宮君は生涯現実世界と接触する気がないのかも知れない。要するにこの静かな空気を呼吸するから、自らああ云う気分にもなれるのだろう。自分もいっそのこと気を散らさずに、活きた世の中と関係のない生涯を送って見ようかしらん……。しかししばらくすると、その心持のうちには薄雲のような淋しさが一面に広がって来た。……三四郎は早く下宿に帰って母に手紙を書いてやろうと思った。

かつてない「孤独の感じ」におそわれた三四郎。自らのアイデンティティを都会に来ていまだ確立できかねている青年は、故郷——それは既に古ぼけたものに変わっていた——の母に手紙を書くことで、この「危機」をさしあたって乗り切ろうと考えたのであった。

君をはじめて見てしとき

希望と期待を持って単身上京したものの「現実世界」に圧倒され、アイデンティティの確立に呻吟していた三四郎は、大学構内の池のほとりで看護婦に連れられた若い女に偶然出会った。そして心を動かされる。それは『於母影』の訳詩の一

句「君をはじめて見てしときそのうれしさやいかなりし」を想い起こさせるような一目惚れだった。「三輪田の御光さん」に代表される田舎の娘とは全く違う新しい女、美彌子。この娘もまた「現実社会」を構成する一員であり、以後三四郎の世界へ入り込むのであった。

大学の新年度が始まり、偶然三四郎が交友を結ぶようになったのは佐々木与次郎という処生術に長けたような男であった。能弁で絶えず動きまわっている与次郎は、時折驚句じみたことを口にして、田舎者の三四郎を時には驚かし、時には感嘆させる。この与次郎との付き合いがもとで、三四郎はかつて上京の折乗りあわせたあの髭の男が、広田先生という高校教師であることを知ったのだった。

この漱石の『三四郎』は、ここに到って主要人物のほとんどが出揃う。舞台は広い東京であるが、この数人の人たちが東京を、そして三四郎の世界を形成しているのである。この数人の人たちを通して漸く三四郎は、自分の周囲を整理してみる余裕を持つようになった。

三四郎には三つの世界が出来た。一つは遠くにある。与次郎のいわゆる明治十五年以前の香がする。すべてが平穩である代りにすべてが寝坊気している。戻ろうとすればすぐ戻れる。……

第二の世界のうちには、昔の生えた煉瓦造りがある。……

……このなか「第二の世界」に入るものは、現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸である。三四郎はこの内の空気をほぼ解し得た所にいる。出れば出られる。……

第三の世界は燦として春の如く盡いている。……そうしてすべての上の冠として美しい女性がある。……この世界は三四郎に取って最も深厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づき難い。近づき難い点において、天外の稲妻と一般である。

旧態依然とした世界、学問の世界、そして恋の世界。この三つの世界を一つのものにするには「国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問に委ねるに越した事はない」という、机上の計算の答のような結論を出した三四郎。以下、この三つの世界がどのように結びついたり離れたりしながら変化していくのかを、みていこうと思う。と言うのも「形成小説」(伊東俊太郎教授の用語)である『三四郎』を味読する際、この考察は不可欠の手続きであると思われるからである。

第三世界の消失

鼻の先にありながら近づき難い「第三の世界」。その世界を構成する代表は野々宮よし子と里見美禰子である。

三四郎は萩とすれすれに立った。よし子は椽から腰を上げた。足は平たい石の上にある。三四郎は今さらその脊の高いのに驚いた。

「御這入りなさい」

依然として三四郎を待ち設けたような言葉遣である。三四郎は病院の当時を思出した。萩を通り越して椽鼻迄来た。

「御掛けなさい」

三四郎は靴を穿いている。命の如く腰を掛けた。よし子は座布団を取って来た。

「御敷きなさい」

三四郎は布団を敷いた。

よし子はこのように「無邪気なる女王」のように思え、三四郎は「子供のようなよし子から子供扱いにされながら、少しもわが自尊心を傷けたとは感じ得なかった」のである。よし子の無邪気さは、その背の高さとの対照で一層きわだっていた。兄の野々宮さんはそんな妹のことを「何しろ子供だから」とか「身長ばかり大きくなって馬鹿だから実に弱る」と周囲に言っていた。更に三四郎にとってこの娘と接してい

るときの感じは「どうしても異性に近づいて得られる感じ」ではなかったのだった。

だが美禰子はよし子と年こそ似ていたが、全く違う娘だった。初対面の時から三四郎には、美禰子に violentous なところがあるように感じられた。「わざと甘えた歩き方」をせず、素直に足を真直に前へ運ぶ。

「もう気分は宜くなりましたか。宜くなったら、そろそろ帰りましょうか。」

美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰を又草の上に卸した。其時三四郎は此女にはとても叶はない様な気が何所かでした。

このように、「叶はないような」ところをも持つ娘であった。親友となった与次郎に三四郎は、美禰子への恋慕の情を見抜かれてしまう。

「あの女は君に惚れているのか」……

「能く分らない」

与次郎はしばらく三四郎を見ていた。

「左ういう事もある。しかし能く分ったとして、君、あの女の夫になれるか」

三四郎は未だ曾て此問題を考えたことがなかった。

美禰子の愛を得ることのみを考えていた三四郎は、自分が彼女の夫になれるか否かについては考えたことがなかった。恋仇と思われる野々宮さんや原口の動向に精一杯注意を払うことくらいしか三四郎にはできなかったのである。

その美禰子はやがて、野々宮さんでも原口でもない所に縁づいてしまう。そしてちょうどその頃、原口の手による美禰子の肖像画が完成し、展覧会の話題をさらった。「森の女」と題するその肖像画の中で美禰子は、初めて三四郎と会った時のポーズを取っていた。しかし「池の女」ではない。もしこれが「池の女」ならば、画面のこちら側に三四郎の姿が存在することになる。しかし「森の女」は、全く彼とは無縁の存在である。この肖像画の完成は三四郎にとって二重のショックとなり、彼の第三世界は一まず終止符を打ち、小説『三四郎』は終了する。

三四郎が得たもの

この様にして美禰子は三四郎の前から去っていった。三四郎はおそらくこの失恋で成長はするだろう。では三四郎が得

たのは、ただこの失恋の体験だけだったのだろうか。

……勝田の政さんの従弟に当る人が大学を卒業して、理科大学とかに出ているそうだから、尋ねて行って万事よろしく頼むがいいで結んである。肝心の名前を忘れたと見え、欄外という様な所に野々宮宗八どのとかいてあった。

上京後の三四郎が受けとった母の最初の手紙には、このように野々宮さんをたよりにせよ、との忠告があった。野々宮さんは三四郎より七つ年上の三十才であった。「静か」で「呑気」な野々宮さんは、学問に志ざす三四郎の良い目標となり、また相談相手にもなりうる人だった。しかし、その彼が三四郎を連れて出た店先で買ったリボンと同じものを美彌子がつけていることに気付いた三四郎は驚く。これ以後三四郎は、野々宮さんをまず対美彌子のライバルとして見るようになる。つまり、一人の女を狙う男同士、という関係で野々宮さんに接するようになったのだ。もっとも、野々宮さんの行動はいずれも三四郎の目を通して本文には描かれている。従って読み手は、三四郎の思い込みを取り除いて読む必要がある。ともかく野々宮さんは、三四郎の母の思惑に反して、三四郎の「相談相手」「保護者」ではなく「恋仇」として三四郎の頭の中で分類されてしまったのである。

三四郎は、この野々宮さんが高等学校時代に教わったという広田先生に、上京の折偶然出会い話もした。その男が広田先生であると判明したのは、与次郎と連れ立って歩いているその男に会ったためである。三四郎はこの人を「先生」と呼ぶ。だが他の主要登場人物とは関わり方が大分ちがっている。野々宮さんには旧師、よし子には兄の師、従って「広田先生」。美彌子は英語を習っている故「広田先生」。与次郎は彼の書生だから「広田先生」。ところが三四郎は、教師対生徒という立場でこの男と接した経験がないという点で、一人特異な存在である。与次郎の友人、という立場で三四郎は広田宅を訪れる。それも与次郎に用がある時のみであった。たまたまかつて汽車で乗りあわせた丈の関係ゆえプライベートなことは面と向かってたずねることはできない。そこで広田先生についての情報源はもっぱら与次郎だった。

「君の所の先生の名は何と云うのか」

「名は甚」と指で書いて見せて、「艸冠が余計だ。字引にあるか知らん。妙な名を付けたものだね」と云う。

「高等学校の先生か」

「昔から今日に至る迄高等学校の先生。えらいものだ。十年一日の如しと云うが、もう十二年になるだろう」

「子供は居るのか」

「子供どころか、まだ独身だ」

三四郎は少し驚いた。あの年迄一人で居られるものかも疑った。

「なぜ奥さんを貰わないのだろう」

「そこが先生の先生たる所で、あれで大変な理論家なんだ。細君を貰って見ない先から、細君はいかんものと理論で極まっているんだそう。愚だよ。……」

「じゃ細君も試みに持って見たら好かるう」

「大に佳しとか何とか言うかも知れない」………

「どうかして、世の中へ出たら好きそうなものだな」

「出たら好きそうなものだって、——先生、自分じゃ何にも遣らない人だからね。第一僕が居なけりゃ三度の飯さえ食えない人なんだ」

上京の時の車中で無暗に水蜜桃を食べ、「囚われちゃ駄目だ」と三四郎に言い残して別れたあの髭の男、青木堂でたばこをふかし「世の中にいて、世の中を傍観している人」と思えたあの男、その広田蓑先生のごとは、こうして少しずつ三四郎の知るところとなった。

そしてある日、与次郎をたずねてみると留守であり、三四郎は広田先生と対座することになった。その折彼は、訪問の理由を考えてみた。

三四郎が広田の家に来るには色々な意味がある。一つは、此人の生活其他が普通のものとおぼわっている。……そこで三四郎は何うしたらあなるだろうと云う好奇心から参考のために研究に来る。次に此人の前へ出ると呑気になる。世の中の競争があまり苦にならない。……

訪問理由の第三は大分矛盾している。自分は美禰子に苦しんでいる。美禰子の傍に野々宮さんを置くとおぼわしんで来る。……これ「野々宮さんと美禰子との関係」が明瞭になりさえすれば、自分の態度も判然極める事が出来る。其癖二人の事を未だ曾て先生に聞いた事がない。今夜は一つ聞いて見ようかしらと、心を動かした。

このような凡そ三つの理由で三四郎は広田先生宅を訪れたのだが、その野々宮さんの話から二人の会話は次のように流れていった。

「君はどうです」と聞いた。

「私は……」

「まだ早いですね。今から細君を持っちゃ大変だ」

「国のものは勧めますが」

「国の誰が」

「母です」

「御母さんの云通り持気になりますか」

「中々なりませぬ」

広田さんは髭の下から齒を出して笑った。割合に綺麗な齒を持っている。三四郎は其時急になつかしい心持がした。

……三四郎の眼前の利害には超絶したなつかしさであった。

……すると広田さんも漸く気が付いた。

「一体何を話していたのかな」

「結婚の事です」

「結婚？」

「ええ、私が母の云う事を聞いて……」

「うん、そうそう。なるべく御母さんの言う事を聞かなければ不可いない」と云ってにこにこしている。丸で小供に対する様である。三四郎は別に腹も立てなかつた。

「大きな未来を控えている自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう。是より先もう発展しそうもない」と、三四郎は初対面の折、この広田先生を判断した。十年一日の如く高校教師をつとめてきた広田先生は、成程「もう発展しそうもない」。だが、このほどまた偶然二人きりで話し合うことになった三四郎は、それ迄とは別種の感情

を抱いたのである。即ち広田先生に対して「なつかしさ」を感じ出した。そしてその広田先生に、「なるべく御母さんの言う事を聞かなければ不可いない」と小供扱いいされるように言われはしたものの、何ら反発を感じなかつたのだ。

上京した三四郎には三つの世界が出来、旧態依然としたその第一の世界は明治十五年以前の香がし、それは母によって、より視覚的には母からの手紙によって代表された。古ぼけたものではあつても「なつかしさ」を有している世界である。野々宮さんの家へ母が送った「ひめいち」を彼の家で食べた時、三四郎は「久しぶりで故郷の香を嗅いだ様で嬉しかった」。この「ひめいち」以降、久しぶりに感じたなつかしさが、あの広田先生の笑顔だった。第二の世界、即ち学問の世界の住人である広田先生が、第一の世界の特徴である「なつかしさ」を持つに至つたのである。それだから三四郎は小供扱いいされても「別に腹も立てなかつた」のだった。

その日帰宅すると、下宿には母の手紙が届いていた。

……三四郎はすぐ封を切つた。今日は母の手蹟を見るのが甚だ嬉しい。

それ迄、東京の「現実社会」とは無縁に思われていた母の手紙が、広田先生との会話のため、いつもとは違つて見えた

のだった。端的に言えば、広田先生の存在を通して三四郎は、第一の世界と第二の世界とを結びつけて考えることが出来るようになったのである。

さて、次に三四郎が広田先生と二人きりで話をする事になったのは、広田先生擁立事件失敗ののち、「弁解」に訪れた折である。

「ああ眠かった。好い心持に寝た。面白い夢を見てね」

先生は女の夢だと云っている。それを話すのかと思つたら、湯に行かないかと云い出した。二人は手拭を提げて出掛けた。

湯から上って、二人が板の間に据えてある機械の上に乗って、身長を測って見た。広田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。

「まだ延びるかも知れない」と広田先生が三四郎に云つた。「もう駄目です。三年来この通です」と三四郎が答えた。

「左うかな」と先生が云つた。自分を余程小供の様に考えているのだと三四郎は思つた。

広田先生に誘われ三四郎は湯へ行く。『破戒』の主人公瀬川丑松が猪子蓮太郎と一緒に湯に入り、背を流し流されたように、広田先生と三四郎もまた、流し合いをしたかもしれ

ない。ともかくこの裸の付き合いののち、三四郎はまた小供扱いされたのだつた。

二人で広田先生宅へ戻ると、先生は三四郎に不思議な夢を語ってきかせる。その話がもとになり、いつしか話題は「結婚」のことになっていった。

「そんなに結婚を妨げる事情が世の中に沢山あるでしょうか」

先生は煙の間から、凝と三四郎を見ていた。

「ハムレットは結婚したく無かつたんだろう。ハムレットは一人しか居ないかも知れないが、あれに似た人は澤山いる」

「例えばどんな人です」

この問いに対し広田先生は、母一人の手で育てられながらその臨終に際しその母から、お前の本当の父は某で、その人の世話になれと言われた子を例として挙げる。

「……すると、其子が結婚に信仰を置かなくなるのは無論だろう」

「そんな人は滅多にないでしょう」

「滅多には無いだろうが、居る事はいる」

「然し先生のは、そんなのぢや無いでしょう」

先生はハ、ハ、と笑った。

「君は慥か御母さんが居たね」

「ええ」

「御父さんは」

「死にました」

「僕の母は憲法発布の翌年に死んだ」

憲法発布の翌年といえ、広田先生は十代後半の少年である。文学に関心を抱く感受性の強い少年だったのであるまいか。ならば例にひかれた「その子」こそまさに広田先生その人だったのであろう。だが三四郎に問われると、広田先生は笑って話題を変えたのだ。与次郎は「細君を貰って見ない先から、細君はいかんものと理論で極っているんだぞうだ」というように、広田先生が独身を通す理由を三四郎に説明した。広田先生は、二十年前に会った少女に夢の中で再会した。会ったのは憲法発布の年だった。そして先生の母親が亡くなったのはその翌年だった。少女に再会する夢に出会ったからこそ、こうして「結婚しない理由」を一つの例え話の形をとりながらも話す気になったのかも知れない。だとすると三四郎は与次郎も知らないような秘密を聞かされたのである。広田先生は初対面の折三四郎に、「囚われちゃ駄目だ」と

処生の鉄則のようなことを伝えて去っていった。偶然の再会ののちは、いつしか「なつかしさ」をも持つ人物として三四郎には思えるようになる。そして小供扱いもされた。年齢は二十ほどちがっている。この二人は、教室での師弟関係はない。では一体、この二人の付き合いは何と言えば適當だろうか。「父のない子」三四郎は、「子のない父」広田先生を次第に発見するようになったのだ。上京後間もない時分、三四郎は三つの世界を一つにしたい、という願望を抱いた。しかし美禰子は去っていった。だが広田先生という「父」を、少なくとも「父のイメージを持つ人」を、三四郎は得たのだ。